

【ねがいましては】

令和5年5月3日

KYOWA SCHOOL

第392号

「上手な勉強法？」

『上手な勉強方法がわからないという悩みを抱える子どもは約7割に上り、この3年間で増加していることが、東京大学とベネッセ教育総合研究所の「子どもの生活と学びに関する親子調査」で分かった。』

ある日の読売新聞記事です。実は私には「上手な勉強法」というところに少しこだわりがあります。逆にしてみると「下手な勉強法」になります。上手なら、下手なら、何が変わってくるのでしょうか。当然「成績」です。やはり新聞でも、東京大学でも、教育産業でも、やはり「勉強」＝「成績」なのかな・・・と感じてしまうことです。

前回の【ねがいましては】でも取り上げたのですが、「現状打破の力」とは少し距離がありそうです。

まず「上手な勉強法」から私が感じたこと、「楽しんで成績を上げる」という印象が漂うことです。なるべくなら苦労せずに成績を上げたいというものです。あっちでゴツン、こっちでゴツン、壁にぶつかりころびながらもやっとのことでゴールにたどり着く。その経験があつて、目前に大きく立ちはだかった目標を乗り越える「力」を身につけることができるはずなのですが、楽に勉強をして楽に成績が上がってしまったのでは、やがて目の前にそれほどでもない壁が立ちはだかった時、乗り越えられないのではないかと思うのです。

たしかに利点はあるかもしれませんが。上手な勉強法をしたことで、今までにない成績の上昇を経験したとします。すると俄然今までにない前向きな気持ちが表れ、取り組む気持ちに意欲が増しそうです。やがて吸収の範囲が増し、ゆくゆくは有名大学へと合格できるのかもしれませんが。ただし心配が残ります。「勉強はたいしたことではない」とか「自分には才能がある」などが一部の子に宿ってしまった場合、やがてその子が社会へ旅立ち、そう大きくもない壁にぶつかったとき、その子は「下手な勉強法」で苦労しながら時間をかけやっとのことで登ってきた子からすれば、折れやすい「ひと」へとになってしまうのではないかということです。

これでは「現状打破」の力を身につけたということにはなっていません。現実という荒波を堂々と生き抜く力が今を生きる若者には必要なはずだと、前回登場された作家の朝比奈あすかさんは書いていらっしゃいました。

子どもたちは総じて勉強がきらいです。これはあくまでも学校の勉強のことです。ここで学校からの宿題をやっている子の姿を見ていると、実につまらなそうに取り組んでいますし、プリント型式の宿題などは、わからない部分があつても空欄にはしにくい、ですからわからなくても何らかのこたえを書き込みます。これは学びではありませんし、真剣に考えた末の空欄が教師との信頼関係を壊してしまうという危険性も発生いたします。

さて、では上手な勉強法とは、理想の勉強法とは・・・わたしが思うのは、まず「こうやりなさい」という正解をいきなりぶつけないでスタートをしてもらいます。あっちこち右往左往しながら徐々に自身から自分にふさわしい歩き方を発見していきます。この時間がほしいのです。しかし学校の授業は待ってはくれません。先へ先へと進んでいきます。乗り遅れます。大切なことは、その子に添うことです。あっちこちぶつかることが学びには必要なこと。その行為が尊いこと。指導者はそれをじっと見守ってあげること。やがてその子は正解へとたどり着きます。しかも正解への道は何本もあります。その子はやがて別の道をまた探りはじめます。合ったからそれで終わりにしないことです。

しかしながら学校では「合えばよい」のです。成績偏重主義の特徴です。結果、子どもたちのころには他の道をさがそうという意味は生まれにくくなります。「マル」がつけばオーケーという終着です。

「学びの楽しさ」が発見できる時間を子どもたち一人ひとりに設定してあげることが上手な勉強法だと思います。

東京大学名誉教授の養老孟司さんが最近出された本に書かれている「一行」にころを惹かれました。

『教育が子どもの「好き」を削ぐ』です。養老さんは少年時代に昆虫が好きでたまらなかつたそうです。しかし当時の教育によってその昆虫研究の時間をそがれてしまったそうです。よくお母さまから「勉強しなさい」と言われると、養老さんは「無視」されたそうです。だから今でも昆虫が大好き・・・。「無視」という意思表示がいいですよ。

つまり、子どもがはじめて学びに接したとき、その学びが「好き」でスタートできたとしたら、それは紛れもない「上手な勉強法」のスタートになります。好きなのですからその子のころはいつでも前向きですし、へこたれませんし、途中、どんなに大きな壁が立ちはだかつて、堂々と向かっていくのではないのでしょうか。現状打破の力です。

ここに通うS君は、小学校時代から勉強が嫌いな子でした。ごく当たり前な子です。しかし、中学1年生当時に数学を先取りし、2年生当時には高校入試問題を楽しむまでになりました。やがてそれ以上の能力を身につけるにはどうしたらよいかということで取り組み始めたのが「国語」でした。語彙力です。じっくりと活字と親しむ時間を設けました。現在彼は高校へ入り「化学」に取り組んでいます。ほぼ独学です。教科書とじっくり付き合います。不審な語彙を発見するとすかさず調べます。その繰り返しです。充実感を覚えます。夢中になれます。きっと学校では味わえない自分だけの時間、空間、満足感を手に入れているのだと思います。

私はこれこそ現状打破の力、上手な勉強法だと感じています。勉強に「楽（らく）」は毒になります。勉強には成績にまつわる「楽しい」ではなく、成績に縁のない「楽しい」が必要です。